

5. 秋期からイチゴ果実を連続収穫可能な夜冷短日処理法（情報）			
[要約] 一季成り性イチゴ品種を、7月上旬から一次腋花房が花芽分化するまで夜冷短日処理した苗を9月上中旬に定植すると、10月から連続収穫が可能となり、果実は大きくなり、収量は増加する。			
研究室名	野菜・花研究室	連絡先	086-955-0277

## [背景・ねらい]

一季成り性品種を夜冷短日処理すると、頂花房の花芽分化は促進され、10月から生産可能だが、11～12月に収穫できない期間が長くなる。また、果実が小さく、総収量が減少する。そこで、一季成り性品種を10月から連続収穫でき、果実重を大きくできる夜冷短日処理法を確立する。

## [成果の概要・特徴]

1. 「さちのか」を60～70日間夜冷短日処理（以下、連続夜冷短日処理）することで、一次腋花房が花芽分化し、頂花房が雌ずい形成期に発育した苗を育成することができる。
2. 7月上旬から連続夜冷短日処理した「さちのか」苗を9月上中旬に定植すると、10月から頂果房の収穫が始まり、続いて一次腋花房の収穫が始まることから、収穫の中休みがなく、慣行夜冷短日処理（A：10月収穫開始作型）に比べて連続収穫が可能である（図1）。
3. 連続夜冷短日処理によって10月に収穫された頂果房頂果は、慣行の夜冷短日処理の頂果房頂果に比べて、そう果数が多く、果実重は重くなる（図2）。
4. 年内商品果収量は、連続夜冷短日処理が、慣行夜冷短日処理（B：11月収穫開始作型）及び普通促成より多くなる。総商品果収量は、連続夜冷短日処理が、慣行夜冷短日処理（B：11月収穫開始作型）及び普通促成より多くなる（図3）。

## [成果の活用面・留意点]

1. 品種、気温、栽培条件によって花芽分化の早さは異なり、夜冷短日処理期間は異なることから、花芽分化の状況を十分に確認する必要がある。
2. 秋期に果実温度が上昇しにくい高設栽培で適応性は高い。
3. 秋期の気温低下が早い地域で、より有効である。
4. 採苗は、5月下旬頃までにする必要がある。

[具体的データ]

表1 試験区栽培概要

作型	年度	採苗	夜冷短日処理期間	定植日	定植時の花芽分化ステージ
連続夜冷短日処理	H17	5/25	7/10~9/ 8	9/ 8	一次腋花房分化期
	H18	5/25	7/10~9/16	9/16	
慣行夜冷短日処理	H17	5/25	7/10~8/ 5(A)	8/ 5	頂花房分化期
	H18	5/25	8/ 5~9/11(B)	9/11	
普通促成	H17	7/ 5	無処理	9/26	頂花房分化期
	H18	7/ 5	無処理	9/26	

A: 10月収穫開始作型 B: 11月収穫開始作型

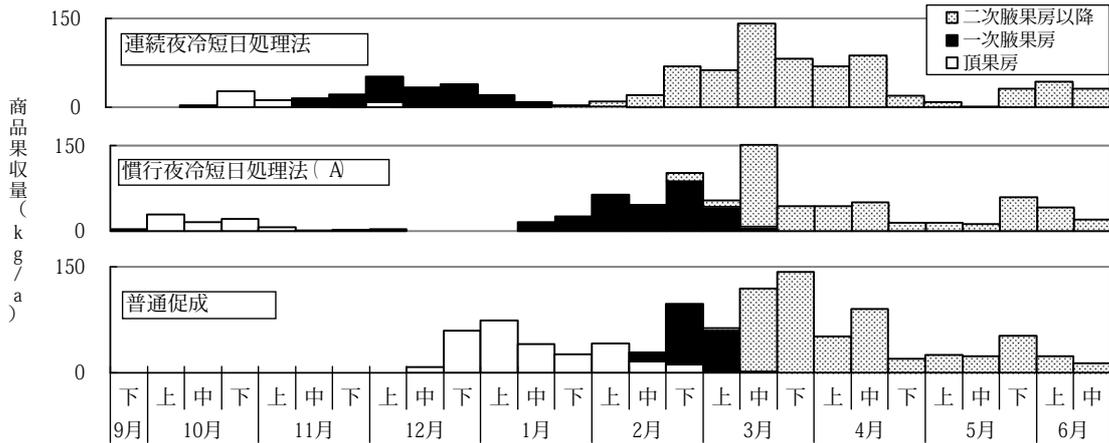


図1 低温処理法の違いが果房別収穫期に及ぼす影響 (平成17年度)

注) 品種:「さちのか」

短日処理時間: 17時から翌9時(8時間日長)、短日処理時間中温度: 15℃

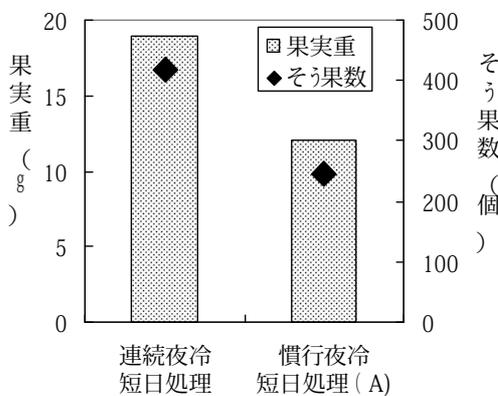


図2 低温処理法の違いが10月収穫頂果房頂果のそう果数及び果実重に及ぼす影響 (平成17年度)

注) 品種:「さちのか」

短日処理時間: 17時~翌9時 (8時間日長)

短日処理時間中温度: 15℃

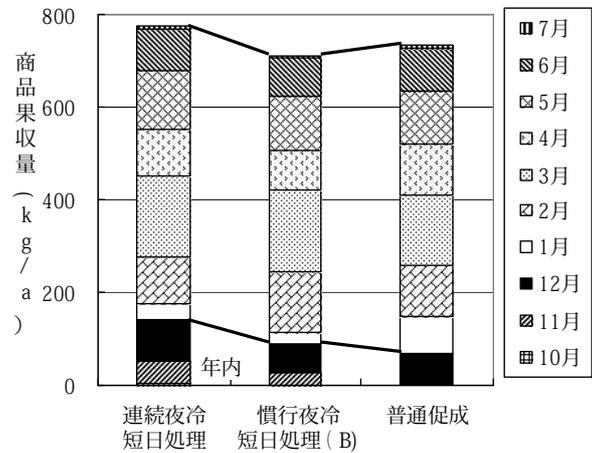


図3 低温処理法の違いが収量に及ぼす影響 (平成18年度)

注) 品種:「さちのか」

短日処理時間: 17時から翌9時(8時間日長)

短日処理期間中温度: 15℃

[その他]

試験研究課題・事業名: 促成栽培イチゴの収穫期間拡大技術の開発

予算区分: 県単

研究期間: 平成 17~19 年度